



集福寺のオコナイ

大津市歴史博物館

学芸員 和田 光生

はじめに

伊香郡西浅井町集福寺のオコナイを事例に、オコナイを検討する時の問題点について考えてみたいと思う。

湖北に多く見られる年頭行事オコナイは、これまで多くの人々を魅了してきた。民俗学にあつては、早くに今津町出身の三田村耕治が昭和10年前後「旅と伝説」等の雑誌に湖北オコナイの事例を報告し、柳田国男もその報告を受けて、たびたびこの行事に触れている。また井上頼寿が精力的に近江の民俗調査を重ね、湖北オコナイの全体像をまとめた業績は特筆すべき仕事であった（昭和35年発行『近江祭礼風土記』）。最近では、中澤成晃の研究もまとめられオコナイ研究の指針を提示している。一方、雪深いこの時期、餅を中心とした華やか行列が進むオコナイは被写体としても魅力的で、多くの民俗写真愛好家が訪れ、その姿をカメラに納めている。研究者も、祭りに興味を持つ人々も等しく「湖北オコナイ」に惹きつけられてきたのである。

では、この行事を分析する視点はどのように設定されてきたのだろうか。多くの研究者に魅了されながらも、オコナイ研究に対する有効な分析はあまり明確にされてこなかった。それだけ単純に割り切れないことを意味しているのだが、ここでは集福寺オコナイで考えたことの一部を整理しておく。といっても雑然とした内容になっており、つまりは湖北オコナイをまとめて考えようとする場合の難しさを裏付けるような中身になっていることをお断りしておく。

集福寺オコナイの概要

J R 近江塩津駅から敦賀方面に向かって徒歩で20分ほど。山間の集落集福寺は、国道八号から少し外れた谷間に細長く立地している。集落の上手に氏神下塩津神社が位置し、その奥に集落はない。集福寺川に沿って、大浦式に分類される民家が立ち並び、ひっそりとした中に川音が響く風情は、外から訪れた者の心を和ませてくれる。戸数60戸ほどの集落で最も盛大な行事は、2月11日のオコナイと8月16日に行われるチャンチャコ踊りと呼ばれる太鼓踊りである。

まず集福寺オコナイの概略を述べることからはじめよう。オコナイを担う人々は、集福寺に住む住民である。毎年2月8日日本殿前で籤が引かれ、翌年の当家二軒が選ばれる。先当・後当と呼ばれるが、ここで選ばれるのは翌年の当家で、受当家と呼ばれる。これに対し、その年お供えを上げる当家を上当家と呼んでいる。当家は、一年かけてオコナイの準備をすすめ、御供の素材となるもち米や粟の育成、ワラビやヨンボの芽などの山菜を集めておく。また一年間身を慎みながら過ごすことも大切な当家の勤めである。

オコナイが本格的にはじまるのは、2月8日の「口開け」である。受当家を決める籤が神社で行われる一方、上当家では、オコナイ当日に向けての準備に余念がない。

そして2月10日は、オコナイで最も大切な餅つきである。午前中は先当が、午後は後当の餅つきが行われる。玄関先に据えられたガス窯を神職が祓い、火が入れられる。白はケ

ヤキの大きなもので、入口を入った土間にむしろを敷きつめ、中央に据えられている。大浦式の民家で行われる場合、土間を上がったニュウジに手伝いの男たちが談笑しながら待機し、奥の座敷には神職や氏子総代が控え、その日使われる道具等が置かれている。



2月10日 オトウ(鏡餅)作り

床の間には「下塩津神社」の軸が掛けられ、供物・灯明が供えられている。玄関から、床の間までの空間は、オトウが調整されるまで男のみの空間となり、女性は入れない。

蒸しあがったもち米を臼に移すとき、蒸籠せいろうを持った竈役は、「エトーエトー」と声を出す。この掛け声は、オトウを動かす時も発せられ、神聖なものを移動するときの呪詞となっている。オコナイは、湖南にも見られるが、例えば水口町杣中のオコナイでもこの詞は聞かれ、広く使われていた可能性がある。餅つきは、男たち4人が、棒杵(縦杵)を押すようにしてこねる。棒杵の場合、練ることで餅になっていくのである。餅つき歌の囃子に合わせ餅つきは進められる。この歌詞は、少し艶のある内容になっており、棒杵を男性に、臼を女性に見立て、豊穰を祈って調整される餅は、艶のある餅つき歌に合わせて、明るい笑いの中で出来上がっていく。

こうして出来上がると「エトーエトー」と言いながら、長老の前に置かれた板の上に餅が運ばれ、彼らの手で餅が成型されていく。オトウは円筒形で、その型になるのが、ナラ

ボソで作られたオカワである。幅15センチほどのナラボソの皮を輪にしたもので、そこに搗きあがった餅が入れられていく。二臼半入ると、餅はオカワの上下にあふれ出し、これを押さえるためサンギと呼ばれる棒二本を上下に当て、これを縛る。こうすると餅が垂れない。こうして出来上がったオトウは床の間に供えられる。

このほか調整されるものとしては、ゴーさん(牛玉宝印)・ハナモチ・ヌカゴ刺しが両当家共通の御供で、先当のみ作成するものとしてアワ餅、後当のみはゴハンである。オトウを中心に様々な御供が調整されると、すべて床の間に供えられ、神職の祝詞で一応その日の行事は終わる。その後、慰労の宴となり、夜は、家族や身内が一晩御供の守りをする。

翌日の11日は、祭典である。オトウが当家を出る直前、家の大黒柱にオトウを背負わせる所作をし「エトーエトー」と唱える。そして家の前で行列が組まれ、下塩津神社へ向かう。行列に係わる人は、集福寺の集落内に居住する、当家と関係ある家々がその役割を担う。行列の中心は、オトウで、これを背負うモチオイ(餅負い)が最も重要な役目となり、一番のオモシルイの役となる。当家にとっての一番のオモシルイは、当家が分家(インキョ)なら本家、本家筋の場合一番はじめに分家した家とされており、「オコナイは古



2月10日 調整された御供を床に飾る



2月11日 神社への奉納行列
スカゴサシを持つ男子、そのあと女の子(ミアゲ)
とそのお母さんが御供を持って続く。ミアゲは、
曲物を頭上で運ぶ。

い親戚を尋ねる」とも言われているとおり、
当家が家として独立したときの歴史を一番に
重んじている。オコナイの当家を受けた時
から、その準備と無事な執行まで、オモシ
ルイは何かと心を配る。当家を勤める機
会は、ほぼ30年に一度、家の当主となっ
て一度経験するかどうかの大きな役目
であるだけに、その家にとって最も大切
な家がオコナイを援助する形が出来上
がったのだろう。このオモシ
ルイを軸に、当家に関わりがある集落
内の家々が様々な役割を担当する。行
事全体は男性を中心に行われるが、こ
の行列に唯一華やかな女性が参加す
る。ミアゲと呼ばれる三組の母と娘
で、母親はあでやかな着物姿で曲げ
物に入れられた御供を頭上にかかけ
進む。

行列が神社に到着すると、御供は本
殿に供えられ、神職による祭典が執
り行われる。祭典が終わると、御供
は当家に下げ、オトウを切り分け
集落中に配られる。そしてオトウ
の型として使われたオカワは、受
当家に渡され、翌年のオコナイ
まで神体として祀られること
になる。

以上がオコナイの概要である。次に
そこから考えられる民俗学的な問
題を見てゆくことにする。

集福寺オコナイの成立

まず、集福寺オコナイの成立の問題
である。オコナイは、一般に寺院の
正月行事である修正会・修二会の影
響から生まれた民俗行事と考えられ
ているが、個々のオコナイの歴史を
具体的に明らかにする資料はほとん
ど残されていない。集福寺の場合、
かつて天台系の寺院吉祥山集福寺
が存在したとされ、十二坊を持つ
大寺院だったという。しかし、織
田信長の比叡山焼き討ちの影響で
廃寺となったと伝えられてきた。

下塩津神社境内に残る、南北朝
期の宝塔が唯一その名残を伝える
歴史的存在となっているが、天台
宗側の資料に集福寺がかつて実在
したことが分かる記録が残されて
いた。『華頂要略』附録第四二卷
に、文明15年(1483)の「集福
寺勸進帳」が採録されており、こ
の時期集福寺はすでに荒廃してい
たことがうかがえる。ただ、寺
院集福寺が実在していたことは、
確認できる。もしオコナイが寺
院行事を起点とするものならば、
集福寺オコナイの成立をこの寺
院の影響と見ることができると
思う。ただ、想像の域を出ない
ことも確かである。

ムラとオコナイー御供からー

オコナイ成立の歴史を詮索する
作業以上に興味深かったのは、
集落とオコナイの密接な関係
である。まず御供の問題から見て
みよう。御供の中心であるオト
ウは、鏡餅である。これは行事
の最後に切り分けられすべての
住民に分配される。神聖な力の
こもった餅を、氏子の人々が
摂取し、一年の幸いを願うこと
は、多くのオコナイに共通して
いる。大切に調整され、供えら
れる姿は、オトウが神体である
ことを実感させる。また、聖
なる餅を形作ったナラボソの
オカワが翌年の当家へ受け渡
され、神体として扱われる点も
注意したい。湖北オコナイに
しばしば見られる事例で、オ
トウの呪力が、オカワを連続
させることで永遠に継続され
てゆくのである。これは、当
家制



2月11日 神社への奉納行列—モチオー—

に深くかかわる問題で、象徴が永続することは、構成メンバーの円環が崩れないことになる。オコナイが継承される根幹は、ここにあるといえるだろう。

このように稲作を象徴するオトウ中心とした儀礼であるが、その一方でオトウ以外の御供にも注意する必要がある。先当の粟餅、後当のゴハンである。ゴハンは、台形の型に飯を詰め、その上に豆腐・ワラビ・ヨンボの芽をのせる。また両当家が作るムカゴ刺しも本来は山芋の蔓に出来るムカゴを使っていた（現在は大根・ニンジン・黒豆）。いずれも山の幸や畑作の作物である。山間の集落である集福寺の水田耕作面積はそれほど広くない。稲作とともに山間の畑や薪炭などが、かつての大切な生業であった。また、相当以前は焼畑も行われていたという。そうした集落であるからこそ、山の幸や畑作物も御供に加えられていたのだろう。集福寺オコナイは稲作を軸とする儀礼といえるが、その一方で土地につながる品々の豊作を祈る側面も併せ持つ儀礼であったといえるだろう。

ムラとオコナイ—社会関係から—

このように御供から見ると、オコナイが地域の幸いを願う儀礼であることが読み取れる。同様にオコナイをめぐる社会構造もこの行事

が地域の祭祀として機能していることをうかがわせる。当家におけるオカワの象徴性や当家とオモシルイの関係は先に記したが、この当家を勤めるということは、集落の構成員として大きな意味を持っている。そのことを端的にあらわすのは、集落内の住人が全て当家を済ませた時に行われる「立て替え」の時である。立て替えは、オコナイの籤を一から引きなおす前に行われるもので、まずオコナイを構成するメンバーの確認が行われる。例えば集落に籍を残しながら他所で生活している人々に対し、当家を勤める意志が有るかどうかを確認する。つまり当家を勤めることが、住人としての義務と考えられており、集福寺に戻って生活するのであれば当家を勤めておく必要があるからだ。また、行事内容で改正すべき点があれば、この時に改正される。氏子全員が寄って、立て替えにあたり話し合うべき議題を話し合い、総意のもとで新たなオコナイがはじまることになる。オコナイの大きな節目がこの時なのである。

集福寺オコナイは、当家とその親戚によって運営されることから、イエを軸にした行事と映るが、当家がオカワを連続させていることや、立て替えなどを含めて全体を見渡すと、やはりムラの行事といえるだろう。

オコナイ成立の問題と御供や社会組織の問題は一見断絶しているように思える。修正会・修二会の問題から話を起こすとどうしても、地域の問題を深める視点がおろそかになるが、行事自身は、地域で生まれ、営々と続けられてきた。オコナイの各場面における人々の和やかな笑顔と雰囲気は、この行事の原点であり、この雰囲気があったからこそ今に続いているように思える。地域の歴史を含めた多角的な分析が、求められる行事といえるだろう。

滋賀文化財教室シリーズ No.206号

発行年月日 2003年1月31日
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525